

「腹部単純 X 線診断」第 4 版

自治医科大学教授・総合医学 I 永井 純 編著
 帝京大学助教授・放射線科学 築根 吉彦 著
 自治医科大学講師・総合医学 I 田中 修

三重大大学教授・第 1 外科

川原田 嘉 文

近年の画像診断機器の進歩は著しいものがあり、US、CT、MRI などにより疾患の早期診断、治療の向上に大いに貢献してきています。しかしながら、以前に比べ腹部単純 X 線写真の有用性はいささか軽視されがちであるような気がしますが、臨床の場で最も必要で、数多く目にするのは、依然これら腹部単純 X 線写真であることに変わりはありません。更に急性腹痛などで患者の一般状態が不良な場合、十分な時間をかけて種々の検査法を駆使することはできず、最小限の検査で治療方針を立てなければならない状況に遭遇することがしばしばあります。その際、単純 X 線写真は必須の検査であり、そこからいかに多くの情報を得るかはその読影力に頼るしかないのです。

筆者は米国で 6 年あまりの間、レジデントとして研修を積んだ時期がありましたが、その際、いろいろな専門家が一同に会して 1 つのテーマについて議論する合同カンファレンスなどにおいて、画像診断の読影力の重要性を痛感したものでした。当時はもちろん現在のように US、CT、MRI などといった機器は存在しておらず、単純 X 線写真、造影

検査のみで質的診断を下す必要性がありました。米国の卒後教育の方針は、少ない検査からどれだけ正確に多くの情報を得るかといった基礎的な部分を重視しており、分厚い成書と格闘しながら 1 枚の写真の読影に取り組んだものでした。

本書をひもといてまず最初に驚いたのが、筆者が以前米国で学んできた内容、経験してきたこと、すなわち臨床医として理解しておくべき最低限必要なエッセンスが効率よく盛り込まれており、米国での研修時代のテキストを思い出させてくれたことであります。撮影法、正常解剖、正常 X 線像、異常 X 線像と続き、わかりやすいシェーマ、ときには CT、血管造影写真などを織り交ぜての解説は、腹部臓器を基礎的・総合的に理解するには理想的です。更には手術後の腹部単純 X 線像について多くの頁数を割いて言及しており、われわれ外科医のニーズにも十分応える内容です。また、各種レントゲンサインとその解説、参考文献が付記されており、より深く勉強しようとする者への配慮もなされている良書だと言えましょう。

筆者は三重大大学第 1 外科教授に就任した 1994 年 7 月 1 日から、新た

に米国の卒後教育に準じたシステムを開設しました。すなわち、病棟における診療担当者をチーフ・レジデント、シニア・レジデント、ジュニア・レジデントから成るコア・チームとして 2 組設けました。そして前述した筆者のアメリカでの経験をもとに問診、視診、触診などの基礎的な分野から臨床家としての実力をつけるべく、これらコア・チーム間で切磋琢磨しつつレジデントの研修を行っています。当然、腹部単純 X 線写真の読影はまず最初に熟達する必要があります。そこで、当教室では本書を教科書の 1 つとしてレジデントのみならずスタッフに至るまで座右の書として熟読するようスタッフ・ミーティングで指示したところです。

卒後まもない若手外科医のみならず、すべての医師ならびに臨床実習に入った医学部高学年の学生諸君にも、医師として少なくとも 1 度は本書を通読することをお勧めいたします。

● B5 224 頁 図 73 写真 194
 1994 定価 5,356 円(税込) 円 400

医学書院 刊(☎ 03-3817-5657)